

シノロジーから言語科学まで——ヨーロッパの中国語学の多様性

Christine Lamarre (Inalco-CNRS-EHESS, CRLAO)

ラマルル・クリスティーン (イナルコ・東アジア言語研究センター)

はじめに

「学問」には「場」というものがある。中国研究の場合、ヨーロッパ全体を場とする学術活動は、後述のヨーロッパ中国学会のような学会などを除けば、必ずしも多くはない。本稿ではまず第一節で「学問の場」としてのヨーロッパを概観し、次に第二節でヨーロッパにおける中国研究で大黒柱の一つを担ってきたフランスに焦点を当て、その状況について紹介する。そこでは学問の区分の成り立ちについても触れるが、続く第三節でその問題を「人間社会科学」の中でやや特殊ともいえる言語学という分野からも捉え直し、「学術的領域」（ディシプリン）と「地域」としての「中国」という二つの足場の交差・接合のあり方、及びその中で生まれる緊張関係を取りあげる。そして、最後にパネル主催者に課された「展望」と「問題点」をいくつか提示して、締めくくる。本稿に用いるヨーロッパの各学会、組織などの名称一覧をアルファベット順位にして文末の付録として付す。また、重要な学会や研究組織について、より詳しい紹介を注釈の形で提供する。

(一) 学問の場としてのヨーロッパ

学会

ヨーロッパを基盤とした学会の主たるものとしては、ヨーロッパ中国学会（EACS）と、その姉妹学会で言語学に特化したヨーロッパ中国語学会（EACL）がある。ともに学会誌を発行しない。地理的に欧州連合の範囲を、そして欧州連合の科学研究が公式に掲げる範囲（ERA）をも超え、ロシアにまで広がっていることが両者に共通する一大特徴である（EACSの2016年大会はサンクトペテルブルクで開催された）。どちらの学会も若手研究者養成プログラムとして夏期講習をもうけている。

ヨーロッパ中国学会（EACS、中国語では「欧州漢学学会」¹⁾）は1975年に創立され、会員1200人ほどの規模で、文学、哲学、美術といった「人文」系の学問だけでなく、歴史、人類学、社会学、宗教学、さらには法律・経済、メディア・映画・教育などという「社会」系の分野までもが含まれる点で、「中国哲学・中国文学・中国語学研究に従事する者の全国的かつ総合的な学会」たる日本中国学会よりもカバーする研究領域は広い。ここには、日本においては中国に関する学問の細分化を反映して数々の学会・研究会が存在していることも関係している。

ヨーロッパ中国語学会（EACL、中国語では「欧州漢語言語学学会」²⁾）は1998年に創立され、会員は300名ほどで、言語学分野に特化した学会である。

なおヨーロッパには、ヨーロッパ中国学会のほかに、「欧州アジア研究連盟」³⁾のごとく、高等教育・研究機関を繋ぐネットワークもあること付言しておきたい。

研究プロジェクト

ヨーロッパ研究領域（ERA）が2000年に発足して以来、科学研究の公的な場として、ヨーロッパ発の科学研究戦略が図られると同時に、研究者も知識もヨーロッパ内で自由に行き来できること、交流の壁をなくすことがめざされてきた。この「領域」は学会と異なりロシ

アの研究者こそ含まないが、それでも狭義の欧州連合（EU）よりは若干範囲が広い（スイス、イスラエル、トルコ、ノルウェー、アイスランドなどの欧州連合非加盟国が含まれる）。ERAは欧州研究評議会（ERC）⁴という資金助成プログラムを申請できる範囲となっている。プロジェクト型経費の研究者の研究活動経費に占める割合が高くなりつつある趨勢の中で、ERCは百万ユーロ以上と高額であり、博士課程の学生の育成経費（博士論文執筆3年間分の経費）とポストクのポスト数名分の経費も含まれているのが一般的特徴である⁵。筆者の務める大学を含め、各大学、研究機関ではERCプロジェクト獲得作戦を補助するため、専門性の高い職員を雇用したりしている。

研究者の相互採用

EU内で就職することに関しては原則として高い敷居を設けないような制度設計がなされており、研究職についてはそれが実現されやすい環境にある。フランス国立科学研究センター（CNRS、本稿第二節参照）で毎年採用される外国籍研究者の割合は研究者全体の約3割を占めており、外国籍の7割は広義のヨーロッパ（科学研究における欧州研究空間の国）出身者が占めている。但し、大学教員の場合は、各国とも採用にあたって当該国の公用語の運用能力を求めるなど条件を付すことが多い。英語による授業が設けられている英国、オランダ、北欧の大学は風通しがよいが、国によっては状況が異なる。フランスの場合、文系の分野では、フランス語以外の授業は極限られている上、学位論文も英語執筆の許可がなかなか下りない大学がまだ少なくない。一方、国内の研究助成金の申請過程においてここ数年英語で研究プロジェクトを提出することが求められるようになっており、フランスの高等教育・研究政策における言語選択問題は矛盾に満ちていると言わざるを得ない。フランスの場合は、大学の教授・准教授の外国籍採用者は文系ではそれぞれ1割と2割前後である（2014年の採用に関する公式報告による）。外国籍の大学教員の大多数はヨーロッパ出身者（とりわけイタリア）と北アフリカ出身者だが、中国研究の場合、もちろん中国・台湾国籍の採用者が目立つ。

（二）フランスの中国研究

フランスはヨーロッパにおける中国研究で大黒柱の一つであり続けている。研究者の陣営とそれを支える研究組織と機関の充実度からみても、修士・博士という研究者育成とその土台たる基礎教育を担う学部レベルの専門課程の「中文」の存在を考えても、その構造と状況について詳しく紹介する価値があると思われる。

1) 中国研究を支える骨格その一：フランスの「混合型」研究組織

フランスの多くの研究組織は、大学（及び大学に準ずる高等教育機関）と国立科学研究センター（CNRS）による二本立ての「共同研究ユニット」（UMR）となっている。たとえば筆者の所属大学では授業を受け持つ機関はInalco（国立東洋言語文化学院）でありながら、研究活動の場はCRLAO（東アジア言語学研究センター）となっている。この研究センターはUMR 8563というコードが割り当てられた組織であり、構成員はInalcoとEHESS所属の大学教員と、CNRS所属の純研究職研究員とに二分される（UMRのMはミックス「混合」、Uはユニット、Rはリサーチにあたる）。こうした、授業義務のある者と研究を専門職とする者による混成の「共同研究有ユニット」以外に、世界で一般的に見られるような、大

学教員のみで構成される研究チームもある。基本的な研究費で劣る後者に対し、大学と国立科学研究センターの研究費と技官や事務職員の恩恵をうける UMR は恵まれていると言われる。UMR は5年間を単位として評価され、解体・再編成という可能性もある。もちろん、新しく構成されることもありうる。だが、いずれの場合も、関係する大学と CNRS の指導部との間では厳しい交渉が行われる。

外から見ると、フランスのこの特異な研究組織は分かりづらい感が有ろう。フランスでも「上海ランキング」を気にするようになってから、各研究組織がメンバーの発表する論文に表示する所属について厳しいルールを設けるようになった。その結果、筆者の所属が文頭にあるような、従来に比べ異常に長い Inalco-CNRS-EHESS, CRLAO という形で表示するよう最近義務化された。煩わしいとしか感じないが、ある意味で、本節で紹介しようとしている研究環境を物語る実例として有用であろう。

学術的な環境においては、中国研究者の大半は現代中国に特化した研究センターではなく、東アジア地域を対象とした研究センターに所属している。その代表的なものを以下に簡単に紹介する。それ以外だと、学術領域によって区分された研究センターの中で活躍する個人の研究者ということになるが、それについては本稿では取り上げないことにする。なお言語学分野に特化した筆者が所属する研究所についての紹介は、本稿第三節で行う。

従来のシノロジーの継承

中国研究の場合は、一般の大学のほかに、長い伝統をもつ特殊な高等教育・研究機関も大きな役割をはたしている。

たとえば百年以上の歴史をもつ、フランス国立極東学院 (EFEO) は、従来のシノロジー (漢学) のコアをなす古代中国研究を継承している。フランス国立極東学院は北京、香港 (香港中文大学内)、台北 (中央研究院内) を含む東アジア各国に 18 の支部 (アンテナ) をもち、北京センターは雑誌『法国漢学』を発行している。ペリオやマスペロのような学者が活躍した機関でもあり、教育には直接かかわらない純研究機関である。高等研究実習院 (EPHE) にも 10 名ほどの専門職の中国研究者が所属しているが、これは修士・博士課程のみの機関であり、学部課程は設けられていない。両者ともに歴史学、宗教学、考古学、文献学、思想史、人類学、文学史という分野をカバーする人材を擁している。

フランス国立極東学院の中国研究者はいくつかの研究チームに分かれるが、高等研究実習院の中国研究者は東アジア文化研究センター (CRCAO) に属する。東アジア文化研究センターは敦煌研究やチベット史研究の伝統を受け継ぐ混合型の組織で、EPHE のほかに CNRS、パリ第 7 大学といった所属の古代中国の人文社会科学を研究する学者が集まっているチームである。同じく百年近くの歴史をもつ中国研究高等院 (IHEC) は 1972 年からコレージュ・ド・フランスの下に置かれ、現在その「中国思想史」講座を任されているアンヌ・チェン (Anne Cheng) 氏も東アジア文化研究センター (CRCAO) の所属である。

アジア中心の世界に注目する現代社会科学

近現代中国社会を専門にする研究センターとしては近現代中国研究センター (CECMC) とフランス現代中国研究センター (CEFC) が中心である。

近現代中国研究センター (CECMC) は社会科学高等学院 (EHESS) 内に置かれているもので、17 名の研究者のうち、13 名もが CNRS 所属であり、残りは EHESS 所属である。なお EHESS は大学に準ずる高等教育機関であるといっても、修士・博士課程のみが設けられている点で、上述の EFEO や EPHE に近く、教育と研究の比重が一般の大学とは相当異なる。

フランス現代中国研究センターの研究対象は台湾、香港、シンガポールなども含むフランスの国立研究センターである。専属の研究者 10 数名が短期か数年間の滞在で配置されるほか、プロジェクトによっては博士課程在学学生を抜擢することもある。東アジアでは香港、台北、北京の三か所にオフィスを置いている。

フランス現代中国研究センター (CEFC⁶) はフランスの在外研究機関ネットワークの一つであり (IFRE、または UMIFRE といい、日本の日仏会館、バンコクの現代東南アジア研究センターもこれに該当する)、その経費は外務省と CNRS が負担している。CEFC は現代中国の政治・経済・社会・文化研究に特化した研究センターで、雑誌を年に 4 期発刊している。掲載論文は英文・仏文の 2 言語で記され、発刊から 1 年後にウェブサイト上でだれでも読めるオープン・アクセスとなっている。

パリの外の研究拠点

以上、在外組織とパリを所在地とする組織を紹介したが、2010 年に完了した高等師範学校 (ENS) の再編により、リヨン (Lyon) も目下アジア研究の拠点として強化されつつある。

リヨンの東アジア研究所 (IAO) のメンバーのうち 7 名が古代から現代まで、中国の人文社会科学の各分野の研究に携わっている。関連する高等教育機関としては、リヨン大学と ENS、そしてリヨン政治学院が、アジアにおける法律・政治面で特色有る研究を行っている。

エクス=マルセイユ大学 (Aix-Marseille Université) に設置されている「イラジア」 (IrAsia) に、阿城、莫言、高行健の翻訳・研究の第一人者のデュトレー氏 (Noël Dutrait⁷) 及び李漁の翻訳・研究で知られているカゼール氏 (Pierre Kaser) をはじめ、中国文学とその受容、翻訳の実践と翻訳研究を担っている研究者が集まっている。

IAO と IrAsia のどちらも混合型の研究チーム UMR の形をとっている。

2) 骨格その二：大学教員と学会

筆者の勤務先：イナルコ

パリの大学のうち、パリ第 7 大学と筆者の勤務先であるイナルコは中文学科が置かれていることもあって、従来の中国研究の中心となってきた。なおパリ第 7 大学 (正式名称は Paris Diderot) は 2018 年にパリ第 5 大学との合併が決まり、「パリ大学」 (Université de Paris) となる予定である (つまりパリ第 7 大学の存在は 2019 年までとなる)。イナルコ (Inalco フランス国立東洋言語文化学院) も合併の動きが一時あったが、本稿を脱稿する時点では台風一過の状況と言うべきか、当面は「イナルコ」のままで存続できる見込みである。

イナルコは元「東洋語学校」であり、コレージュ・ド・フランスに次いで早く (1840 年代) から中国語講座を設置した教育機関であるが、貿易と外交の第一線に立つ者の教育実践という任務も従来からあり、現在に至ってはヨーロッパで最大規模の中文学科が設けられている (学部生約 500 名のほか、修士課程と博士課程もある)。この中文学科は、もっぱら実用語学教育のクラスを担当する外国人教師を除いても、専任教員 20 名ほどを擁し、その研究範囲は人文社会科学の各分野をカバーしている。フランスでは唯一、古代史と近代史と現代史の授業をそれぞれ異なる教員が担い、現代文学と古典文学も同様に担当教員は別々で、中国の地理、経済、宗教、美術史・書道史についても、個別に専門家を擁する、ヨーロッパではやや贅沢な学科となっている。

2018年まで、言語学を専門とする教員を除くと、イナルコの中文学科の教授・准教授は大抵大学内部の研究組織 ASIEs（アジアの複数形）に所属していた。これまで中国研究を担っていた ASIEs の研究活動にフォーカスを戻し、そのメンバーの多岐にわたる活動を示す最近の出版物について紹介したい。文学の領域では、『薛涛に紙の衣を』（Durand-Dastès 等編、2015年、文学アンソロジー、訳・解説）、台湾近現代小説アンソロジー（鄭清文著の「三本足の馬」、龍瑛宗著の「パイパイのある街」などを含む短編集の翻訳と解説、Rabut 等訳注、2冊、2017年）、『極東の鬼の昨日と今日』（Durand-Dastès 等編、文学・文化・美術・映画など多角的「鬼」の研究、2017年、オンラインアクセス可）が刊行されている。また現代社会・経済の分野では『中国の環境危機』（Huchet 著、2016年）、そして宗教学の分野では『聖人の誕生』（仏教史・現代社会、汲喆等編、Ownby ほか 2017年）が挙げられる。

しかし 2019 年に入って、パリの中国研究が置かれている環境は大きく変わった。ASIEs と日本研究センター（CEJ、両者が独立したイナルコ学内チームであった）と元パリ第7大学の教員数名とを合わせるといふ機構改革が行われることになったのである。こうして生まれたのが IFRAE（イフラエ、フランス東アジア研究院）という研究センターで、まだ改編が完了していない現段階でも大学専任教員六十数名、博士課程生七十数名、ポスドク十数名、日本、中国、モンゴル、ベトナムなどの人文科学全般の研究を対象とする、地域研究で組まれたかなりの規模のチームが出来上がっている。これからの展開を予想するには時期尚早だが、研究方向には社会（国際関係や社会・経済・法律を含む）、宗教とことばを軸にした三本の研究方向で構成されており⁸、これから新機軸に基づく研究成果が生み出されることになるだろう。

これに先立って、仏教研究に関しては、イナルコ、高等研究実習院（EPHE）とコレージュ・ド・フランスの三機関に支えられる文教学際研究センター（CEIB）が 2017 年に創立された。これから、新しくできた IFRAE（フランス東アジア研究院）のコアメンバーをなすイナルコとパリ第7大学の教員にどういふ構成員が加わっていくかが、この新しい研究センターの展開のカギを握っている要素の一つであるが、いずれにせよ国際的な可視性が増していくことであろう。

フランス中国学会（AFEC）

フランス中国学会（AFEC、中国語名は「法國漢學協會」）は会員約 300 名で、学会誌『漢學研究』を年に 2 期刊行している。歴史、文学、哲学、言語学、考古学、人類学など人文社会科学の各分野にわたり、時代も古代から現代までをカバーしている。日本に比べてカバーする分野が多いのはおそらく、フランスにおいて中国研究がやや周辺的な位置づけを与えられていることによるものであり、細分化された学会の少なさの反映である。毎年古代中国と近現代中国関係の博論それぞれ 1 篇に優秀賞を授与している。研究動向はブログ（<https://afec.hypotheses.org/>）で知ることができる。

以上を総括すると、従来のシノロジーを研究対象とする古代中国研究にせよ、世界パワーとしての中国の社会・歴史・政治・経済に重点を置く近現代中国研究にせよ、次の数点を特徴として示すことができよう。

- 一、専門職の研究者という太いバックボーンに支えられている、
- 二、現地調査や現地の研究者との交流において困難を軽減できる在外研究組織を有する、
- 三、中国本土プロパーのほかに、日本、台湾、香港などとのつながりが緊密である、

四、中国と日本、さらにはチベット、インドなどといった、アジア広域をカバーするチームが多い。

一点目は研究活動に専念できる時間の保障という側面で大切に、二から四までは自分の研究分野を共有する外国の研究者との交流と、隣接地域の研究者との交流を促進するもので、世界に開かれた学問を可能にする環境と言え、研究者のスタンスにも影響を与える点で重要であるに違いない。

次の3)と4)で、二つの「動き」をピックアップしてその「動態」を伝えることにしたい。

3) 動きその一：地域研究の再発見とアジア研究者ネットワークとしての GIS

以上の紹介で分かるように、中国研究はほかの研究分野と同じように、大学の教授・准教授で教育事業にも携わる人員と研究専門職の研究員に大まかに二分されるが、両方とも同じ研究ユニットを共にするのが一般的である。しかし、大学における学問領域の区分はフランス大学評議会（CNU）が掌握しているのに対して、国立科学研究センター（CNRS）はそれとは異なる区分を設けている。例を人文社会科学に限っていうと、CNUの区分には、言語学は7番、心理学は16番、社会学・人口学は19番、古代史・考古学は21、近現代史と美術史は22番、地理は23番などという学問領域による区分もあるものの、地域別に設けられた区分もある。たとえば、英米言語・文学は11番、スラヴ研究は13番、アラブ・中国・日本・インドなどその他は（広義の「アジア研究」）は15番となっている（理系を含むと、学問分野は合計87のセクションに分かれている）。これに対して、CNRSのセクションはディシプリンのみで区分され、人文社会科学院（INSHS）の9つのセクションに「地域」の視点はない。このことで、大学に身を置く者とCNRSに雇用されている研究者の「学術的なアイデンティティ」が異なりかねない虞が生じる。「セクション」は准教授・教授採用資格獲得・研究員採用・評価・昇進など、キャリアの各段階で研究者の一生を大きく左右するもので、学問のみでなく、仕事の大切な「足場」であることを付け加えておこう。

しかしそれを補うかのように、過去10年間、CNRSは地域をベースにする研究の組織化に力を入れ、研究地域ごとに研究ユニットのネットワークをはかる「ジス」（GIS）を立ち上げた。現在、アジア、アフリカ、中東、アメリカなどが稼働している。これは研究者が個人単位で入会する学会ではなく、高等教育機関、研究チームとCNRSが加入するネットワークである。アジア研究の場合、ジス創立（2013年）以前に、よりインフォーマルな「アジアネットワーク」という土台が存在しており、2年に1度のペースで研究大会を開催してきた。国際的にいうと、ジス・アジー（GIS Asie、英訳は French Academic Network for Asian Studies となる）は定期的で開催されるアジア学者の国際大会（The International Convention of Asia Scholars）の主催にも関わっている（第11回が2019年7月にライデンで開催予定）。大会は主に現代アジアの人文社会科学のトピックを取り上げるもので、ヨーロッパ全土の学者が集まる大規模なものとなっている。

4) 動きその二：研究者の世代交代

シノロジーの分野における世代交代については、フランス社会に対して発信力に優れる二名の学者の例を通して見ていくことにする。

その一人は、先端研究に携わる研究者に自分の専門を語ってもらう講座を50ほど与える仕組みになっているコレージュ・ド・フランスで「中国思想史」講座の担当のアンヌ・チェン氏である。コレージュ・ド・フランスの講義は一般に公開される上に、ラジオで放送され、ポッドキャストで配信されるということもあり、影響力が大きい。アンヌ・チェン氏は「論語」のフランス語訳で知られ（Cheng 1981）、著書の『中国思想史』は日本語に訳されている（Cheng 1997 参照）。チェン氏は2008年の着任時の「初回講義」において（Cheng 2008）、人文科学のディシプリンの専門化が進むのにつれて、漢学者が17、18世紀の啓蒙時代のように自身の世界観と価値観のままに「中国」を好きなように作り上げることはできなくなっていると指摘している。また、フランスの漢学界もアメリカのシノロジーの成果や、フルスピードで人文科学の各分野の方法と理論を吸収する中国の研究成果を無視することはもはやできなくなっているという。そして、チェン氏はフランスのエリートも一般人も中国文化に対して無知であるうえ先入観をもつことが多いと指摘し、フランス社会に対する「啓蒙」の必要性を訴える。昔から本質主義に陥りがちなフランス人に対して、中国に関する一般教養を伝えるすべを模索し、その使命を果たす決心を語っている。こうした取り組みの一端は雑誌 *Le Point* の孔子特集号（2012年）の企画に見ることができる。チェン氏は以前は、イナルコで中国思想史の授業を受け持つ教授であった。

アンヌ・チェン氏のこの構えと対立して映るのは、同じく著名で、一般向けのメディアでも頻繁に発言する、著作が日本語を含めて多くの国で翻訳が刊行されている（例えば Jullien 1996）、フランソワ・ジュリアン氏である（François Jullien、Bougnoux 等 2018 の雑誌『レーヌ』特集号も参照）。ジュリアン氏がパリの人間科学館（Maison des sciences de l'homme）で受け持つ中国哲学の講座名が「他者性講座」（Chaire sur l'altérité、2011年以來）であることが物語るように、氏はギリシャ哲学と中国思想の「隔たり」に西洋思想再解釈の可能性を見出す手掛かりを求める。ジュリアン氏は、あえて「中国化されない」ことを強調する。

チェン氏とジュリアン氏のどちらも現在のシノロジーを代表する知識人である。二人の年齢は数歳しか離れていないが、以上極簡単に紹介したこうした中国研究におけるスタンスの違いは、世代交代の兆しを感じさせる。「隔たり」を自分の学問のカギにすることよりも、「他者性」の立場をとらないと明言するチェン氏の構えの方が若い世代に広がっているように見える。次節でとりあげる言語学の分野でも、東西（欧中）の対立を超えて、難なく特定の学術領域と昔からの「シノロジー」のあいだを自由に「行き来」する若手研究者の姿勢は、チェン氏のこの構えに通ずるところが多いのではないかと。

（三）ディシプリンと地域の緊張関係：言語学のケース

ディシプリンと地域のはざまに身を置くこと

コレージュ・ド・フランスの「中国思想史」講座はフランスのシノロジーの核心をなすとも言える。アンヌ・チェン氏は着任時の初回講義で（Cheng 2008）、中国研究界が「古典」と「現代」とに二分される事態に対する違和感に言及したが、ディシプリンの細分化が著しい「現代」に対して、古典学の世界では古代史・思想史・古典文学・文献学の各分野間の壁が低くなっている。角度を変えれば、漢学（シノロジー）は古典と結びつく学問であり、研究対象が現代に近づけば近づくほど、方法論・基本概念の面では地域色が薄くなり、特定の学術領域の枠組みにはまる趨勢が目立ってくる。これは言語学についても言えることだ。人文社会科学の各分野のうち、言語学の分野はディシプリン特有の方法論及びそれを伴う専門用語の占める位置がとりわけ大きくなっている。しかし一方、フランスの例に戻ると、学問

の足場である大学評議会のような場合、「歴史」はまずフランス史（西洋史に広がる時であっても）、「言語学」は多く「フランス語学・英語学」として捉えられているのは事実である。大学の世界で、自分の身をどのセクションに置くかはある意味で「地域」優先（アラブ・中国・日本・ヘブライその他の言語・文学は15番）かディシプリン優先かという選択に迫られる。古典の伝統のある学問分野（インド・チベット・ペルシア・カンボジアなどを含む）の場合、15番の方がその特殊性を認められて評価される可能性が高いといえる。イナルコの「o」は orientales を指し、これは現在東欧から始まりアフリカ・中米のインディアン諸語まで広がる意味での「オリエント」であり、まさに「他者」そのもののことばと文学であると言える。

言語学研究の進展から中国語に対する先入観を正す啓蒙作業

「隔たり」を理解のすべとするのは言語学の分野でも極自然なアプローチである。19世紀に成熟し、今日でも使われる、同じ語族の言語の語彙を比較して祖語を再構成する比較言語学然り、外国語教育に応用する対照言語学然り、そして言語類型論も多かれ少なかれ「隔たり」からヒントを受ける言語学のサブ領域である。従って、「差」を知的発見に使うこと自体には害はない。では、「他者性」のアプローチはどの段階に至れば知の妨げになるのか。チェン氏は、編集した論文集『今日の中国思想』の序文「他者性神話をお終いにするために」で、該書はフランスの知識層を含めて社会全体に根強く残る先入観を減らす試みで、本質主義に対して、コンテクスト化された正確な情報を提供すると告げる（Cheng 2007）。該書の第三部「アイデンティティの問題：文字と言語」に、ヨーロッパにとって、ことばこそが中国の他者性の象徴であったことに着目したアルトン氏の文章が掲載されている。

アルトン氏（Viviane Alleton、2018年になくなった社会科学高等学院教授）は言語学プロパーの研究（中国語の副詞、ムード助動詞などの著書に加えて、クセージュシリーズで『中国語の文法』と『中国語の文字』の二冊も著している）のほかに、文化により近い中国語の側面を一般読者に伝える「啓蒙者」の一人（例えば1993年に中国文化におけるネーミング文化をめぐる著書を出している）。アルトン氏はヨーロッパが中国語と文字をどうとらえてきたかについても注目してきただけに、その神話の部分にたいしても敏感であった。そのせいか、神経科学と心理言語学の分野が生んだ中国語を読み取るプロセスの研究の進展を非専門家に伝える啓蒙的な論著を表した。この論文集に掲載されている章（Alleton 2007）もほかの論著（Alleton 2003, 2008）も、中国語はアルファベット言語と同じように音声と関わり、単語との関わり、読解過程も驚くべき類似性をもつといったことを解説することで、チェン氏の提唱する「神話破り作業」に貢献した。実は、筆者は2009年に帰国し、イナルコで中国語入門の講義科目を持つようになって改めて、こうした啓蒙活動のありがたさを感じた。中国語教育の現場では、漢字は単語ではなく概念を表す、だからどの方言でも漢字があるから中国語の文章が読める、日本人も読める、等々の固定観念が学生に一般的にある。そのうち筆者も、「隔たり」を起点とするアプローチの害を目にして、それを少しでも緩和する事実を意識して学生に伝えるように力をいれてきた⁹。

ヨーロッパで中国語に対して抱かれる先入観は文字体系によるもの以外にも多く存在する。同書のエピローグ「他者性を超えて」は、数学者のシェムラ氏（CNRS 研究員、Chemla 2007）は、社会学者のグラネー氏（Marcel Granet、1884-1940）が1920年に述べた中国語観、つまり中国語が抽象的な考察と一般化に向かない、科学的思想に適しない、科学の進歩を妨げる要素であるという見方に、漢代の『九章算術』とその後の注釈に基づいてそれに徹

底的に反論する文章である。そういえば、ジュリアン氏もしばしば中国語の特定の単語の意味や動詞に人称やテンス語尾がないといった語彙・形態現象から議論を思想史へ広げ、東西の差を論じがちである。

「永遠なる中国語」の神話

思想史の視点に立つアンヌ・チェン氏のコレージュ・ド・フランスにおける 2016 - 2019 年度の講義シリーズは「普遍性・地球性・コスモポリタニズム（中国・日本・インド）」（*Universalité, mondialité, cosmopolitisme (Chine, Japon, Inde)*）というタイトルになっていることから、中国を孤立した、閉ざされた永遠なる存在として捉えるのではなく、周りとの相互作用とその動態を伝えようという意識が窺える（日本のことは十分に言及できず次回に回すことになった）。これはことばの視点に変えると、やはりまた文字体系の問題にぶつかる。漢字という文字体系は形態変化・音韻変化を直接伝えないから、言語変化と変種間の差異を蔽い隠すことになる。これが、「永遠なる中国語」の神話を生み出す要素の一つである。この誤解を独自の観点から打破しようとする試みも一方で存在する。筆者の所属する東アジア言語学研究センター（CRLAO）は地域とディシプリンを交差させる数少ないチームの一つである。甲骨文、古文文法、文字学から方言、現代語のシンタクスのよりフォーマルな理論言語学までカバーする研究者が集まっている。日本語、韓国朝鮮語、ベトナム語の専門家もいるが、中国語か中国で話される漢語系以外の言語を主たる専門とする研究者が多数を占める。フィールド調査が文献研究と組みあって、この永遠なる中国語のイメージを正すのにどう関与しているかを、二人の研究者の例を以て示しておきたい。

ジャック氏（Guillaume Jacques）は文献に基づく中国音韻学にも通じるが、インド・ヨーロッパ語の比較言語学にまで通ずる若手研究者で、2008年に『嘉絨語研究』を中国語で刊行している（中国語による著者名表記は「向柏霖」となっている）。研究者育成の面では、ジャック氏はギャロン語系の未記述の言語の調査と西夏語の文献研究をトピックとする博士課程生の指導にも力を入れてきた。もう一人の中年研究員の例を挙げておこう。甲骨文文字で記された文献の文法研究を主たる対象とした古代漢語の文法研究に従事しているジャムリ氏（R. Djamouri）は現在、甘粛省の唐汪語（漢語系のことばとみなすべきかどうか論議を呼んでいる、O V 言語の特徴を多く示す「接触言語」）の記述研究に励んでいる。ジャムリ氏はこのように、古代中国語（Djamouri 2013）と中国語の周辺的な変種の両方から言語変化に迫る研究に専念してきた（<http://crlao.ehess.fr/index.php?58>）。ジャック氏は抱合語で「漢語」とかけ離れた形態的特徴を示す、とりわけ動詞の人称接辞などで形態が非常に複雑であるギャロン語の記述につとめ、シナ・チベット語族の歴史の解明を図っている（最近のこの面での成果は Sagart 2019 参照、2019年5月の重慶での講演がネットで「向柏霖教授講座」として検索してみるができる。）。ジャムリ氏はシノロジーのコアにある古代中国語の専門家として『世界言語辞典』における「古代漢語」の項目を担当すると同時に（Djamouri 2011）、「漢字」という書記体系に囚われない中国語への探索を図っている研究者でもある。両者とも CNRS に所属する研究者である。

チームの中から、この二人を取り上げたのは、研究成果のすばらしさという基準のみに止まらず、本稿で注目するフランス社会へのフランス語による発信力と、「発信言語」がフランス語・英語・中国語と三本立てになっているからである。英語はディシプリンの世界に通ずる共通語であるが、中・仏のそれぞれの「執筆言語」の裏に、特定の学問の場、特定の学問の伝統及び特定の国の学術舞台を賑わせる理論的枠組みとアプローチをめぐる論叢をも含

む。ジャック氏の例だけに絞ると、現地調査を行った地域の人々に還元する成果として、携帯電話でも使えるオンラインのジャプグ (Japhug、茶堡) 語・中国語・フランス語辞書をも作成してもある (詳細は <http://crlao.ehess.fr/index.php?266> 参照)。他方で、個人のブログでフランスの古典語学科の瀕死状態を嘆く文章をアップしたり、考古学者の J.-P. Demoule 氏によるインド・ヨーロッパ語の祖語と比較言語学攻撃に強く反論したりと、東アジアの言語学者としてフランスの知識界への発信を怠っていない¹⁰。

終わりに：「中国語・自国語・英語」を媒介とする多角的な研究発信へ

本稿の第一節でヨーロッパ全体を視野に入れることを試みたが、研究者の置かれる具体的な環境はヨーロッパのそれぞれの国でかなり違っているの、一概に論じることはできない。フランスに限っていうと、全世界の大学界を襲う嵐はフランスにも到来している。発表者が帰国した 2009 年はちょうど大学連盟・合併の動きが加速していた時期で、それ以来まるで中国のような、高等教育機関の名称と構成の激しい移り変わりについていくのに汲々としている。このような激変の中であって、フランスの中国研究の現状の強みの一つは「専門職研究者の陣営」であると言える。フランスではマイナーな分野であるがために研究者がばらつきがちな中国研究の場合、UMR (混合型研究チーム) といった入り組んだ研究組織の存在は却って強みとなる。現地調査はやはり授業負担のない純研究職の研究者が有利であるの言うまでもない。もう一点、第一節で指摘したように、研究職の方が外国籍研究者を迎えやすい。これは筆者の所属する研究チームの構成委員でも該当することである。つまり、純研究職の研究者の割合が大きいことで、フランスの中国研究がヨーロッパ全体から (全世界からも) 人材を集めて、ヨーロッパの中でその伝統的な「優位」を辛うじて保てていると言えよう。そして、成果の発信・流通に関係することを加えるなら、研究業績の刊行と著作権問題が世界的に大きな問題となっている中、オープン・アクセスの法的整備 (2016 年) についても、研究者がどの機関に所属しても発表論文を掲載できるポータル (HAL) の整備についても、国立研科学研究センター (CNRS) の果たした役割は大きかったということを指摘しておくべきだろう。

また、ポジティブな面で続くなら、第二、三節で取り上げた世代交代も明るい展望である。難なく特定の学術領域と昔からの「シノロジー」のあいだを自由に「行き来」する若手研究者の姿が目立つ。ヨーロッパではあくまでもマイナーである中国研究は、ヨーロッパ・中国・それ以外のアジア・アメリカなどと交流・共同研究を行うことが一般的になっており、自国語での論文執筆の機会は減るかもしれないが、交流による刺激と視野の広がりなどが多く、メリットの方がはるかに多い。しかし、フランスでも、日本でも、これがマイナス要素を生み出さないように注意しなければならない点もある。まず、自国語による概念創作を放棄しないようにフランス語 (日本語) の高度な学術論文を執筆し続けることが大切である。そして世界の研究者と対話するための中国語・英語の運用能力 (論文執筆能力を含めて) を身につけて発信力を維持することも要求されている。この二つの要求に応じるのは容易ではないことは否定できない。このジレンマは地域とディシプリンとの緊張関係とも重なるところが多い。対策として、学問の場 (大学、研究チーム、学会、研究予算配分を決定する各層の人々や機関) が多様なアプローチに寛容である、即ちほぼ「地域」に徹した研究者と、漢学 3 対ディシプリン 7 のような割合など、複数の声が聴ける場を作ることが考えられる。また、一人の研究者にできることには限界があるので、共同研究を敬遠せず、ファクト

とコンセプトのあいだに往来できるように、力を合わせる仕組みを重んじる学問の場をつくること。

ここで、日本とフランスにおける中国研究について個人的感想を一つ述べたい。いまのフランスと日本の中国研究は人員の多さ、研究の歴史伝統、教育環境、そしてその関係の発信（一般向けの番組と啓蒙書、翻訳から学術書まで）を受容する読者・聞き手の市場から考えると、その難しいバランスを保つことはまだ可能であると筆者は信じている。そういう条件を備えていない地域も少なくない世の中では、喜ぶべきことである。ヨーロッパの多くの国では、しっかりした（古典語・歴史を含む）中国語教育を担える中文学科が存在しないかその存続は困難で、中国語を単なる副専攻として中級程度の運用能力に達するような中国語教育しかないといったケースが多い。ヨーロッパの言語の母語話者の場合、中国語の文献を自由に操るレベルに達するために、学部で生じたその遅れを取り戻すのは容易ではない。留学でそれを補うことはある程度できるかもしれないにしても。

最後に、問題点として、フランスの教育現場に身を置く者として、中国語に関する研究と中国語教育が分断されている現状に危惧を感じていることを告げておこう。日本のように、中国語学研究分野で活躍する者が同時に言語教育に携わるのとは異なり、中学校・高校及び大学の入門授業を担当する教員は中国語に関する一般知識を伝えることについては必ずしも関心をもたない。一方、研究者は英語や中国語で学問の世界で高く評価される雑誌で論文を発表するのに忙しく、教育現場に関心が薄い。現在、中等教育における中国語学習者が爆発的に増えていることに伴って、本屋の語学コーナーに中国語の入門書が数多く置かれるようになってきている。しかし、フランスで最近20年、30年の中国語に関する研究成果を知ろうと思えば、中国語と英語による専門性の高い学術論著はあるものの、フランス語による一般向けの啓蒙書が見つからない。これは今後、改善が求められる点である。本稿の筆者もまた、自身その任務の一翼を担わねばならない一人であると考えている。

なお、末筆となってしまったが、タイトルの「シノロジー」に関し、断っておきたい。本稿では「従来」を加えて用いることが多かった。言語学畑の研究者は必ずしも自らの研究を「シノロジー」と呼ぶことを好まない。たとえば上で言及したジャック氏や歴史文法で知られるペローブ氏のウィキペディアのページを見ると、「言語学者」(linguiste)として紹介されている。一方、フランスのメディア界においては、中国現代史・政治学を研究する「中国研究」分野の専門家をも「シノログ」(sinologue)というのが一般的である。例えば本稿を脱稿する時に、話題となっていた香港の「反送中」に関するコメントを求められる専門家はそうのように紹介されることが多い。

引用文献

Alleton, Viviane. 1993. *Les Chinois et la passion des noms*. Paris : Aubier.

Alleton, Viviane. 2003. *Ecriture chinoise. Données de psychologie expérimentale. Études* 3, 347-355.

(オンライン・アクセス : <https://www.cairn.info/revue-etudes-2003-3-page-347.htm?contenu=article>)

Alleton, Viviane. 2007. *L'écriture chinoise : mise au point*. In Cheng, Anne (dir.) *La pensée chinoise aujourd'hui*. 241-269. Paris : Gallimard.

Alleton, Viviane. 2008. *L'écriture chinoise. Le défi de la modernité*. Paris : Albin Michel.

Bottéro, Françoise & Redouane Djamouri. 2006. *Ecriture chinoise. Données, usages et représentations*. Paris : Ecole des hautes études en sciences sociales.

- Bougnoux Daniel & François L'Yvonnet (sous la direction de). 2018. *L'Herne. Jullien*. Paris : Editions de l'Herne.
- Chemla, Karine. 2007. Penser sur la Chine avec les mathématiques de la Chine ancienne. In Cheng, Anne (dir.) *La pensée chinoise aujourd'hui*. 353-386. Paris : Gallimard.
- Cheng, Anne. 1981. *Entretiens de Confucius*. Paris : Seuil.
- Cheng, Anne. 1997. *Histoire de la pensée chinoise*. Paris : Seuil. 日本語訳は『中語思想史』、アンヌ・チャン著、志野好伸・中島隆博・廣瀬玲子訳、東京：知泉書館、2010年。
- Cheng, Anne (sous la direction de). 2007. *La pensée chinoise aujourd'hui*. Paris : Gallimard.
- Cheng, Anne. 2008. La Chine pense-t-elle ? Leçon inaugurale prononcée le jeudi 11 décembre 2008 (中国思想史口座着任時の初回講義、オンライン・アクセスは <https://books.openedition.org/cdf/170?lang=fr>)
- Djamouri, Redouane. 2011. Le chinois ancien ». In Emilio Bonvini, Joëlle Busuttil, Alain Peyraube (dir.), *Dictionnaire des langues*, pp. 984-995. Paris: PUF.
- Djamouri, Redouane (羅端) . 2013. 從上古古漢語構詞形態的角度再談商、周兩代語言區別、『歷史語言學研究』第六輯。
- Durand-Dastès, Vincent. 2001. Many Gardeners for a Hundred Flowers : the Last Twenty Years (1980-2000) of Chinese Literature in French Translation. In Kühner, Hans & Harnisch, Thomas, *China übersetzen*, Bochum: Projekt Verlag 2001, 11-33 (オンラインアクセスは <http://www.inalco.fr/enseignant-chercheur/vincent-durand-dastes>)
- Durand-Dastès, Vincent & Valérie Lavoix. 2015. *Une robe de papier pour Xue Tao*. Paris : Espaces&signes.
- Durand-Dastès & Vincent et Marie Laureillard (dir.). 2017. *Fantômes dans l'Extrême-Orient d'hier et d'aujourd'hui*. Paris : Presses de l'Inalco, 2 volumes. オンライン・アクセスは <https://books.openedition.org/pressesinalco/1274>
- Gu, Ming Dong. 2013. "Linguistic Sinologism." Chapter 8 in *Sinologism: An Alternative to Orientalism and Postcolonialism*, 187–215. London: Routledge
- Huchet, Jean-François. 2016. *La crise environnementale en Chine*. Paris : Presses de Science-Po.
- Jullien, François. 1996. *Fonder la morale*. Paris : Grasset. 日本語訳は『道徳を基礎づける』、フランソワ・ジュリアン著、中島隆博・志野好伸訳、東京：講談社、2002年。
- McDonald, Edward. 2018. The "ideograph" and the 漢字 *hànzì*. A cross-cultural concept with two mutually invisible faces. *Translation and Interpreting Studies* 13-2, pp. 271–292
- Ownby, David, Vincent Goossaert & Zhe Ji (eds.) 2017, *Making Saints in Modern China*, Oxford: Oxford University Press.
- Rabut, Isabelle & Angel Pino. 2017. *Anthologie historique de la prose romanesque taiwanaise moderne*. Vol. I & II. Paris : You Feng.
- Sagart, Laurent. 2006. L'emploi des phonétiques dans l'écriture chinoise. In Bottéro & Djamouri (dir.) *Ecriture chinoise. Données, usages et représentations*. 35-53. Paris : Ecole des hautes études en sciences sociales.
- Sagart, Laurent, Guillaume Jacques, Yunfan Lai, Robin J. Ryder, Valentin Thouzeau, Simon J. Greenhill, and Johann-Mattis List. 2019. Dated language phylogenies shed light on the ancestry of Sino-Tibetan. *PNAS (Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America)* 21 : 10317–10322. (オンライン・アクセス <https://www.pnas.org/content/116/21/10317>、内容紹介は Jacques 氏の重慶講演のビデオは <https://v.douyu.com/show/Qyz171QVNE17Bj9> 参照)。

¹ ヨーロッパ中国学会 (European Association of Chinese Studies、略称 EACS、中国名「欧州漢学学会」、<http://chinesestudies.eu/>) は 1975 年に創立、パリで登録。会員数は 1200 人前後。趣旨はヨーロッパの中国研究関係の学術活動の促進である (The purpose of the Association is to promote and foster, by every possible means, all scholarly activities related to Chinese Studies in Europe. The

Association shall not engage in any political activity.)。大会は2年に1回、ヨーロッパで開催される(たとえば最近の開催地は次のごとくであった:2018年スコットランドのGlasgow、2016年はロシアのSt. Petersburg、2014年はポルトガルのBraga、2012年はフランスのParis、2010年はラトビアのRiga、2008年スウェーデンのLund、2006年はスロベニアのLjubljana、2004年はドイツのHeidelberg、2002年はロシアのMoscow、2000年はイタリアのTorino、1998年はスコットランドのEdinburghなどとなっている)。筆者は2012年のパリ大会の実施委員長を(パリ第7大学のGilles Guiheux氏と)務めたときに、この学会のパワーを体験できた。四日間の開催期間で370件の研究発表が行われ、参加者が400人を超える規模の学会となった。当学会は学会誌も論文集も発行しない一方、特定の国に見られる中国研究者の学術領域の偏りを改善する策として、修士・博士課程在学生を対象とする夏季講習会(summer school)を実施している。これは特定の主題を掲げるテーマ講習の形をとる。たとえば最近の講習はチェコ(2019、Olomouc、Modern Asian Literatures and cultures)、英国(Lampeter、2017、Hidden in Plain Sight: Materiality, Meaning and Accessibility of Chinese Objects in Local Collections)、ロシア(2015、St Petersburg、Traditional China: a Closer Distant View)、イタリア(2013、Venice、History and Historiography in Imperial China and the Encounter with the West)などがある。学会は大会実施のほか、ヨーロッパ全体における学会・研究会情報、グラント情報、就職情報、ポスドクポストの情報、刊行物情報などを発信しており、ネットワークの役割が大きい。そのほか、若手研究者への支援活動として、ヨーロッパの図書館・資料館への訪問の資金援助企画と若手奨励金(Young Scholar Award)などがある。蔣経国基金の資金援助はいくつかの企画において見られるが、2014年7月のポルトガルのいわゆる「Braga事件」以降(詳細は<http://chinesestudies.eu/?p=584>参照)、孔子学院との関係が些か複雑になっている。

² ヨーロッパ中国語学会(European Association of Chinese Linguistics、略称EACL、中国語名「欧州漢語語言学学会」、<http://www.chineselinguistics.eu/>)はパリで1998年に創立。大会は2年に1回(本来EACSと交互)、ヨーロッパで開催。最近の開催地はイタリア(2018年Milano)、ドイツ(2015年Stuttgart)、フランス(2013年Paris)、イタリア(2011年Venice)、ポーランド(2009年Poznan、などとなっている。若手研究者を育成するため、博士課程在学生を対象とした夏期・春季講習を実施している。11回目の夏期講習は今年ナポリで予定されている。筆者は2013年のプラハ春季講習を執行した際、これが「手作り」の講習会でありながら、若手研究者に国際交流の重要な場を提供していることを実感した。論文集は二冊のみで(Budapest 2008とLeipzig 2006)、学会誌も発行していない。

³ 欧州アジア研究連盟(European Alliance for Asian Studies、略称EASS)は目下スペインのCentro de Estudios de Asia Oriental at Universidad Autónoma de Madrid(CEAO)、イタリアのトリノTorino大学、スイスのÉcole Polytechnique Fédérale de Lausanne、ドイツのthe Heidelberg Centre for Transcultural Studies(HCTS)、フランスのGroupement d'Intérêt scientifique Études asiatiques(GIS Réseau Asie)、ハンブルクのGerman Institute of Global and Area Studies(GIGA)、オランダライデンのInternational Institute for Asian Studies(IIAS)、リヨンのInstitut d'Asie Orientale、ブカレストのInstitut Roman de Studii Euro-Asiatice、ドイツハンブルクのCentre for East and Southeast Asian Studies、スウェーデンのLund University、ロンドンのSOAS(School of Oriental and African Studies)、コペンハーゲンのNordic Institute of Asian Studies(NIAS)をつなぐネットワークである。

⁴ 欧州研究評議会(European Research Council、略称ERC)の人文社会科学系のERCプロジェクトは募集開始の2007年以來の獲得国のランク(終了したものを含む1549個)のトップ10は次の通り:英国479、オランダ213、ドイツ155、フランス129、イタリア120、スペイン83、ベルギー65、スイス40、オーストリア40、イスラエル38(申請範囲はノルウェー、スイス、イスラエル、トルコ、ウクライナ、旧ユーゴや中央アジアなどのEU外の国を含む)。なおイギリスのこれからの扱いは注目されている。たとえば*Financial Times*の記事

(2018/4/6 号 : UK science can still take nothing for granted post-Brexit) はイギリスの研究者・機関が ERC の一流研究者向けの Advanced Grants の 269 件 (2018 年度分) のうち 66 件をも獲得したと報道し、イギリスは毎年 ERC に収める資金より多い研究費を獲得してきたと指摘した上、Brexit 後に関する協議は未定だと報道。こうした危惧の声が頻繁に聞こえる (例えば英国紙 Guardian に掲載された声明 Hard Brexit could cripple UK science, say Nobel prizewinners、2018 年 10 月 23 日、『論座』2018 年 11 月 22 日記事参

(<https://webronza.asahi.com/science/articles/2018111900009.html>)。グラント獲得のほか、ビザ問題で研究者の移動を妨げるルールが大きな関心事項となっている。

⁵たとえば、2018 年の夏に始まった中国研究関係で博士進学前の修士卒業生を対象とする助成金 (doctoral fellowship) 及び博士号取得者を対象とするポスドクを募集する ERC プロジェクトとして、次の二件のプロジェクトを挙げよう。その一つは [Elites, networks, and power in modern urban China \(1830-1949\). Historical “big data” in modern Chinese history](#) という数か国にまたがる大規模なプロジェクトである。代表は Christian Henriot 氏 (フランスの研究組織は IrAsia、Aix-Marseille University) で、中国史専門の博士課程学生を三名採用するための募集を行った。その下位プロジェクトは以下の 3 つである : (1) *Methodologies: From texts to historical “big data”*; (2) *China elites: From large-scale database to data-rich history*; (3) *Case studies: quantitative/qualitative crosswalks.*。このプロジェクトは UK (Bristol, Lancaster)、オランダ (Leiden)、スイス (Basel)、ドイツ (Göttingen) という欧州国に加え、上海と台湾の研究者ネットワークによる。スイスの Lena Henningsen 氏が代表を務める The Politics of Reading in the People’s Republic of China (READCHINA) が若手を対象とする starting grant の類である。スイスに拠点を置き (Institute of Sinology, Freiburg University)、ポスドク 1 名、博士課程生 3 名を募集した。

⁶フランス現代中国研究センター (Centre d’études français sur la Chine contemporaine、略称 CEFC) は「現代中国研究に特化した中国を基盤とした唯一の独立したヨーロッパの研究センター」 (The only independent European Research Centre in China entirely devoted to the study of contemporary China.) と自慢している。雑誌 Perspectives Chinoises/China Perspectives はオープン・アクセスでウェブ上読める (<http://www.cefc.com.hk/china-perspectives/issues/>)。

⁷ドクトレー氏の最近の翻訳新作は『战友重逢』の翻訳である (2017、Le Seuil)。関係の論文として今年 2018 年 7 月に刊行された Traduire entre les langues chinoise et française. Un exercice d’interprétation ([Annie Bergeret Curien 篇](#), Éditions de la Maison des sciences de l’homme, Paris, 2018) 掲載の Noël Dutrait – Le traducteur, interprète ou co-auteur? を参照。訳書リストは <https://leo2t.hypotheses.org/membres-statutaires/noel-dutrait> を参照。高行健との出会い及び『靈山』の翻訳作業 (1995 年出版) を語るビデオは以下のリンクで見ることができる (https://www.canal-u.tv/video/fmsh/traduire_deux_nobel_de_litterature_gao_xingjian_et_mo_yan.32021)。なお 1980-2000 年間の中国文学の仏文訳について、Durand-Dastès 2001 を勧める (オンライン・アクセス可)。

⁸フランス東アジア研究院 (IFRAE) の詳細な紹介は次のウェブサイト参照されたい : <http://www.inalco.fr/recherche/equipes-recherche/ifrae/axes-recherche>。

⁹アルトン氏の最後の所属は近現代中国研究センターであるが、筆者の研究センターの CRLAO とも関係が深く、この一連の研究は、チーム・ワークという側面もある。これは例えば、2006 年に刊行された論文集『中国の文字 : データ、使用、表象』 (Bottéro & Djamouri 2006)。誤解がないようにつけておくと、中国語教育現場における間違っただ漢字観に関し、ジュリアン氏は何らの責任ももたない。フランスではその神話を歓迎する広い市場があり、それに応じる様々な人物もいる。本稿ではこの論争の詳細を紹介するつもりもない。興味を持つ方はたとえば Sagart 2006 を参照。英語圏における類似した論争の紹介については例えば Gu 2013 (第 8 章) 及び McDonald 2013 が参照できる。

¹⁰ インド・ヨーロッパ語と歴史言語学をめぐる論争についてはたとえばサガール氏 (Laurent Sagart) とドムール氏のディベートの映像を乗せた『エロドート』という歴史学雑誌のウェブサイト参照されたい: https://www.herodote.net/histoire/synthese.php?ID=2035&ID_dossier=324

付録 文中に現れる主なヨーロッパの機関・学会・研究組織名称一覧 (アルファベット順)

AFEC [Association Française d'Études Chinoises フランス中国学会。学会誌 *Études chinoises* 『漢學研究』 (*Chinese Studies*) を刊行 (中文要旨あり、<https://afec.hypotheses.org/2018-international-study-days-workshop>)。

CECMC [Centre d'études sur la Chine moderne et contemporaine] 近現代中国研究センター。

CEFC [Centre d'études français sur la Chine contemporaine フランス現代中国研究センター。刊行誌は *Perspectives Chinoises/China Perspectives* (<http://www.cefc.com.hk/china-perspectives/issues/>)。

CEIB [Centre d'études interdisciplinaires sur le bouddhisme] 文教学際研究センター。

CEJ [Centre d'études japonaises] 日本研究センター。

CNRS [Centre national de la recherche scientifique] 国立科学研究センター。

CNU [Conseil national des universités] フランス大学評議会。

CRCAO [Centre de recherche sur les civilisations de l'Asie Orientale] 東アジア文化研究センター。

CRLAO [Centre de recherches linguistiques sur l'Asie Orientale] 東アジア言語学研究センター。刊行誌は *Cahiers de Linguistique -- Asie Orientale*。

EACS [European Association of Chinese Studies] ヨーロッパ中国学会。

EACL [European Association of Chinese Linguistics] ヨーロッパ中国語学会。

EFEO [École française d'Extrême-Orient] フランス国立極東学院。刊行誌は *Cahiers d'Extrême Asie* 『極東カイエ』 (中国語: 法國遠東學院)。

EHESS [École des hautes études en sciences sociales] 社会科学高等学院。

ENS [Ecole normale supérieure] 高等師範学校。

EPHE [École pratique des hautes études] 高等研究実習院 (中国語: 高等研究實踐學院)。

ERA [European Research Area] ヨーロッパ研究領域。

ERC [European Research Council] 欧州研究評議会。

GIS [Groupement d'intérêts scientifiques]

GIS Asie (2013年~): <http://www.gis-reseau-asie.org/> 東アジア言語研究センター。

IFRAE [Institut français de recherches sur l'Asie de l'Est] フランス東アジア研究院 (英文名称は French Research Institute on East Asia)。

IFRE [Instituts français de recherche à l'étranger] (UMIFRE というとこれも *unité mixte*)。

IHEC [Institut des hautes études chinoises] 中国研究高等院 (中国語: 法蘭西學院高等漢學研究所)。

Collège de France コレージュ・ド・フランス。

Inalco [Institut national des langues et civilisations orientales] (フランス) 国立東洋言語文化学院 (かつての「東洋語学校」*Ecole des Langues Orientales, Langues'O*)。

IAO [Institut d'Asie Orientale] 東アジア研究所 (リヨン)。

INSHS [Institut des sciences humaines et sociales] 人文社会科学学院 (CNRS で人文科学・社会科学の9つのセクションをカバーする上位の部局)。

IrAsia [Institut de recherches asiatiques] (イラジャ、CNRS/AMU) は AMU (Aix-Marseille Université, エクス=マルセイユ大学) に置かれているアジア研究センター。

Sciences-Po Lyon リヨン政治学院。

UMR [unités mixtes de recherche] 共同研究ユニット。